

救濟問題

020370-000-0

特53-228

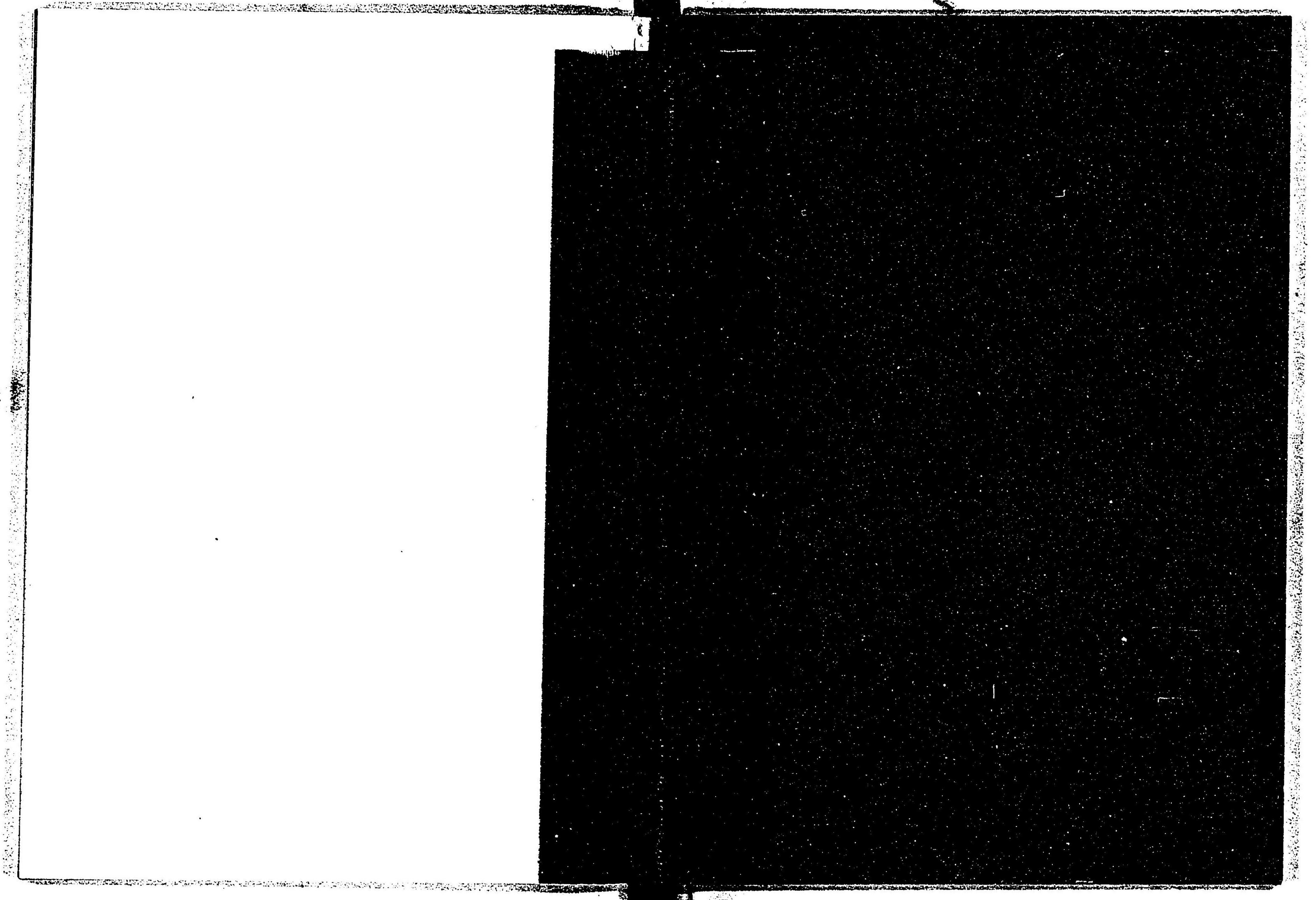
救濟問題

柳沢 讓/著

M42

ABI-0177





T-36

救濟問題



特53

228

「靈か肉か」「保惠師基督」及「無差別」の著者なる柳澤讓兄、去九月二十七日遂に身を離れて主と偕になれり、惜しむべき哉。

同兄就眠に先たちを新に一小冊子を脱稿せり、「救濟問題」即ち是なり。今本館編輯部の校訂を経て爰に之を發行す。願はくは神此書を祝して多數の靈魂に神の眞理を明示し給はんことを。

明治四十二年十月

閱者識

明治

42 11 24

内交

救濟問題

△ 貴方は救はれたく欲ひますか

「眞個に私は救はれたいです」

「そして貴方は、神の企て給ふた途にて救はれたく欲ひますか」

「ハイ、然し、私の如き憐れな罪人が、現世に居る間に確かに救はれてゐることを何うして知ることが出来るでせう」

「よろしい、私は最も穢れ果てた者のために開かれた確かな天の途を貴君に示し、そして吾等が奈何に單に神を信ずることに由て、自己の救はれてゐることを知り得られるかを申し上げたい」

「私は聖書を読みました。そしてその中に録されてある聖言は悉く信じます」

「私は我國に神の存在を疑ふ者や、聖書の教理を信じない者のあることを聞いてゐる。しかし私は神の聖靈の助けに由り、貴君にその明白なる眞理を語りませう。貴君はこれに由て個人的に獨立的に直接に神より救を受くることが出来るのです」

△「先づお尋ねしませう。貴君は、神が貴君を愛し給ふことを知つてゐますか」

「ハイ、貴君から、神は凡の者を愛してゐ給ふことを承りました」

「其れに違ひありません。然し、モ一一度坐つて靜かに貴君自身に

「神が私を愛し給ふことを信じてゐるか」と問ふて御覽なさい。聖書はその事に就て多く言ふてゐるが、この一言でも充分です。神は

…世人を愛し給へり」即ち貴君はその世人の一人です。

△しかし、貴君は言ふ。「若し神が私を愛してゐ給ふなら、私が出来

る丈善事をやれば、斯様な仕方のない私でも、彼は憐み給ふて、その多くの罪を大目に見給みであらう」と。ところが之れが抑々救はるゝ者の態度として、全く誤れる點である。

△彼の名は愛である。しかし、その憐れみ深く在し給ふ如く、また正義なる御方である。恩恵に充ち給ふ如く、また眞理なる御方である。彼は一の罪も大目に看給ふといふやうなことはない。貴君はかつて、主イエスキリスト

神御自身が肉體をとりて地上に來給ひ吾等の罪を負ふて死給ふたことを知つてゐる。彼は彼御自身に全く罪を有ち給はなかつた。で、御自身を犠牲として罪を除き給ふた。

△却説神は、彼が獨子を賜ふほどに吾等を愛し給へること、そして吾等の行すべき事は、唯彼(キリスト)を信するにあることを宣ふてゐる。勿論貴君は彼が地上に來り死給ふたことを信する。しかし、

貴君は、神が貴君に彼を賜へたまふたことを信じてゐるか。ア、貴君は言ふ。「私は何うか左様感じたい」と。しかし、神は、これを感じずることを貴君に求め給はない。彼は、その聖子を貴君に賜へたことを述べて、それを貴君が信ずることを求め給ふ。「神はその生たまへる獨子を賜ふほどに世人を愛し給へり」。貴君は之れを信ずるか。信じないか。貴君が、神の賜物を受納れた時、貴君は彼を信ずる。

△是れは、主イエスが地上に在し給ふた時、御自身の口から語り給ふた所である。彼は曠野に於けるイスラエル人の蛇に咬まれしことについて語り給ふてゐる。彼等は皆咬まれてゐた。銅の蛇は杆の上に載せられた。而して其れを眺めた者は皆生かされた。此蛇は、イスラエル人が眺めると眺めないにと拘らず、彼等に賜へられてあつた。あるイスラエル人は、蛇が自分の爲であることを感じたいも

のだと言つたであらう。若し、貴君が彼等の一人であつたなら、何んと言つたであらうか、要は之れである。貴君は確かに咬れて居るか。貴君は滅亡に定まれる罪人であるか。其れなら、貴君は有の儘にてキリストを接くる権利がある。福音の單純なところはこゝだ。しかし、これが多數の大人物を躓し、此世の學者には愚なるものと見えた。

△人々は病氣の時か、若しくは死ぬることを考へる時に、悪しき習慣を離れ、善人となり得るやうに祈る、そして出来る丈善事をしやうとするものである。しかし、かゝる骨折りは、決して何人をも救はない。假りに、蛇に咬まれたイスラエル人が、銅の蛇を眺める代りに、薬を塗つたり、膏薬を貼つたり、紮帯をしたり、また飲薬を服用し始めたとする。これは人々の感ずることの出来るものであら

う。しかし、神は徐に宣ふ。「眺めよ。杆の上の蛇を眺めよ」と。主イエスキリストを信ぜよ。然らば汝は救はるべし」

△しかし、貴君は言ふ。「私は隣人よりも悪くない。若し、私が左様に悪い者なら、多数の悪人と運命を共にする筈である。しかし、私より悪い者は多勢ある。私は神の憐れみに由り望を有つて居る」と。さて、之れは一般に人々の抱き居る妄念である。救を受けなければ何人も一の罪の爲めに永遠に罰せられなければならぬ。罪は神の子を人とならしめ、天より來りて死なしめた。貴君よりも悪い者のあることは眞個である。而して、彼等が悪しき運命を有つことも事實である。要するに私の之れを書くのもその理由で、世には神なしに生活してゐる者、またそれを氣付かない者が多勢である。

△僞ることの出来ない主イエスキリストは、濶き路と窄き路とがあ

つて、多数の人々は濶き方に行き、少数の人々は窄き方に行く。そして濶き途の終極は無限の苦痛にて、窄き方の終極は無限の幸福なることを語り給ふた。貴君は唯一の機會を有つばかりである。而して、それは一の罪の爲めに地獄にやられることを告げ給ひし神を信ずるにある。人律法を悉く守るとも若しその一點に躓かば全體を犯す也」(雅二〇十) 貴君は少くも一の罪を犯した。今、貴君の有として、唯一の救主として、キリストを接けよ。

△しかし、こゝに神の眞理に何處までも抗ふ悪魔といふ奴がある。彼は世界一の大詐僞師である。若し、彼が貴君の他の者よりも悪いことを信じないのを見出すか、或は貴君が尙一の機會を有つことを見出すなら、彼はそれに應じて賛成したり、反對したりして、巧妙に貴君を惑し、而して終には眞理に遠からしめる。いづれにせよ、

彼の謀る所、告ぐる所は唯悪である。彼は或人には貴君は救はる、には餘り罪が深過ぎると告げ、又他の人には、貴君は善人だから救はれる必要はないと告げるであらう。いづれにせよ、救を確實に握らしめないやうにするのだ。

△却説、主イエスキリストは、失ひし者を尋ねて救はん爲に來り給ふた。自ら罪人の首だといつた人は、多年前から天國にゐる。されば眞黒な、虚偽者で、慾張な、盜賊で、殺人者で、かつて酔拂つて墓場の傍で眠つてゐた白髮頭の罪人にも、二人の盜賊の中間に懸けられ給ふた彼に由て、神の愛は達いてゐる。神は之れを宣ふ。これは一切である。吾等は、これを了解することは出来ない。これは唯だ、彼の聖旨に由てなされた。彼は今吾等に語り給ふ。吾等はキリストを罵つた盜賊の死後樂園に入つたことを知つてゐる。何故貴君

は、それを知ることが出来ないか。何故貴君は今救はれないか。而して、若し、今救はれないなら、決して救はれる時はない。

△かつて、私は、ある貧しき婦人に會つて、神の國とキリストの事を語り始めた。彼女は私の言ふことを解しなかつた。私は、彼女に、「貴女は、これまで主イエスの事をお聞きになつたことがありませんか」と問ふと、彼女は、「否」と答へた。私は言葉を續けて、この蒼空の上に主イエスが住み給ふこと、彼が人となりて天より降り、此地上に來り、吾等の罪の爲めに死給ふた。それ程吾等を愛し給へることを語つた。

△ところが、丁度、其處から程遠からぬ所の監獄に死刑に處せらるべき犯人があつた。人々は頻りに、彼の事を評してゐた。私は、婦人に對ひ「貴女は死刑に處せらるゝ人の事を聞きましたでせう」と

言つた。彼女は「ハイ聞きました」と答へた。私は言葉を續けた。
「假りに、彼が執行される前に、夜、牢獄の中に横つて居る時、一人の紳士の戸を叩く音を聞く。紳士は直に中に入つて坐る。而して言ふ。

「お前は律法を破つた」

「ハイ、ハイ、眞に悪い者でござります」と答へて彼は泣き叫ぶであらう。

「お前は罪に定められてゐる」

「ハイ、ハイ、また當然でござります」

「お前は死刑になるのだ」

「ハイ、明日でござります」

「ウム、しかし、余は國王の皇子である。今夜王の命令で、お前の

處へ来た。これは余のつとめである」といひながら、犯人の着てゐる衣服を脱せ、自らそれを着て

「余はお前の身代りだ」

と宣ふであらう。罪人は驚きながら、衣服と交換する。彼は夢ではないかと怪んでゐる。王子は犯人の衣服を着て、チャンと其處に坐つてゐる。夜が明けた。執行掛の役人は這入つて来る。彼は眞個の犯人を見逃す。彼は犯人の衣服を着てゐる王子を外に引いて往く、やがて彼は死刑にかけられる。しかし、罪に定まれる人は、その開かれたる戸口から自由に出て行く。

貧しき婦人は驚いた。そして、キリストが罪人の爲に——多くの點に缺けてゐる、満らぬ者の爲に、成就げ給ひし聖業を思ひ廻らした、それは靜かに彼女の胸に善なる罪なき聖者が惡人、科人の位置に置

かれたとの大真理を印した。

△「さて、これは吾等を創造り給ひし神が、その聖子について吾等に告げ給ふた事を録したものです。貴女は之れまで讀まれたことがありませんか」「否」と彼女は言つた。私は聖書を開いてこの言を讀んだ。「キリストも一次罪に因て苦を受く義者不義者の爲にせり是我儕を引て神に至らんとてなり」(彼前三〇十八)

「吾等がなほ弱かりし時キリスト定りたる日に及びて罪人のために死給へり……キリストは我儕のなほ罪人たる時われらのために死たまへり」(羅五〇六一八)

彼女は驚いて眼を見張つた。彼女は己の罪人なることを知つた。私は「貴女は神を信じますか。彼は貴女を愛して獨子を賜ふた。王の王、主の主の聖子は、一次は死給ひ、今は復活りて父神の右にゐ給

ひます」と言つた。彼女は驚いて身を慄はしながら「私でも救はれますか」と叫んだ。そこで、私は、彼女に對ひ「私は貴女の救はれる事を告げる權威は少しだに有ちません。しかし、神が其れを宣ひました。そして貴方が救はるゝ爲に、幾ら骨折つても涙流して百萬年間祈つてゐても、彼の聖聲に従ひ、その賜物(キリスト)を接くる半分も、神は悦び給ひません」と告げた。

△以上は彼女と私との會話の要點であつた。それは神に用ひられたやうで、彼女は直にキリストを信ずること、神を信ずる事を告白した。私は次の日の夕方、彼女に會つたが、彼女の靈は静かな安心と歡喜に充ちてゐた。そして罪人の爲に死し榮の王子について聽くことを慕つてゐた。彼女は書を読むことを學び始めた。そして、それは直接に神の聖書から真理を味はんが爲であつた。

△しかし、貴君は言ふかも知れない。「私は彼女の如く無教育な悪い者ではない。私は聖書を読むことも出来る。私はキリストの事なら何んでも知つてゐる。そして常に信じてゐる」と。貴君は常にキリストを信じた。しかし、貴君は、貴君の有として彼を接けたことがあるか。貴君は常に、彼が罪人の救主に在し給ふことを信じた。しかし、貴君自身の救主として彼を接けたことがあるか。而して、若し貴君が、キリストを我有としてゐないなら、貴君は滅亡すべき罪人である。未だ救はれざる人である。

△私は願ふ。それは貴君がバイブルの他の個所を読む前に、先づ神に歸り、感情に由らず、「それは虚偽だ」とさ、やく貴君の心にも頓着なく、「神はその生みたまへる獨子を賜ふほどに世人——（ここに貴君の名を記せ、これは信仰である）を愛し給へる」ことを信ぜん

ことである。私は繰り返して言ふ。キリストが、貴君の爲であることを貴君は感じなくとも、唯信じさへすれば可い。而して斯様に貴君が信するなら、貴君の一切の罪は貴君と神の間から全く除かれる。貴君は一切の者から義とせられる。貴君は最早や刑罰に會ふことはない、貴君が今其處にゐる如く天國についても確かである。何となれば、神の聖言は之れを保證した。

△かくの如く貴君は救はれる。しかし、貴君の中の悪しき心は決して減くなつてはゐない。これは救はれた人の屢々悪魔に乗せられる點である。私は屢々「奈何して人々が救はれてゐることを知ることが出来るか」との疑問に明白に答へることの出来ない人々に出遇つた。即ち、「若し、自分が救はれてゐるなら、自分の中に罪がない筈だ」といふ人達である。

△神は宣ふ。「もし罪なしと言は是みづから欺けるにて真理われらに在なし」(約壹一〇八)と。一切の異説はこゝから始まるらしい。即ち、彼等が、わが内の罪と、わが上の罪とを混同するに在る。私は、かつて其事を知らんと欲ふた小女に唯だ救の途を示すことを試みた。そして彼の靈魂の救はるゝ爲に福音を語つた。

「カルバリー山で十字架に釘けられた者は幾人でしたか」

「三人で、二人の盜賊と其中央のイエスとです」

「二人の盜賊は同様に悪い奴でしたか」

「ハイ、彼等は當然罰を受くべきものでした」

「二人は同様に相果てましたか」

「否」

「何か區別がありましたか」

「一人はイエスを信じましたが、モ一人の者は彼を信じませんでした」

「今、これ等の三人を観るに、各自罪については何でしたか。キリストを信じなかつた方の盜賊は、彼の内に罪を有つてゐたのですか」

「ハイ」

「彼は彼の上に罪を有つてゐましたか」

「ハイ」

「ところで、キリストは、彼の内に罪を有つてゐ給ひましたか」

「否」(まことに、彼は汚れなき聖者である。かつて彼は汚され給ふたことはない。彼は癩病に觸はる。そして尙且潔くあるを得給

ふた)

「キリストは彼の上に罪を有ち給ひましたか」

「ハイ」

「それは、彼御自身のですか」

「否」

「キリストを眺めた盗賊は、彼が眺めた後に、彼の内に罪を有ちましたか」

「ハイ」

「彼の上には罪を有ちましたか」

「否」

△此の十字架は、また此世の人々を區別する。吾等は、二人の盗賊の如く、「切罪人である。一方は救はれた罪人である。而して他

方のは救はれてゐない罪人である。一方は神を信じ、キリストが彼の爲であることを信ずる者である。他方は信じない人々である、一方は彼等の内に罪はあれど彼等の上に罪なき者である。何んとならば彼等は罪なきキリストの上に、それを見棄てた。他方のは彼等の内にも彼等の上にも罪を有つ人々である。而して、やがて、此世の人々は此等の盗賊の如く死ぬるのである。ところで、彼等の内に罪なくして死んだ者は一人もなかつた。また永遠にないであらう。二人の名は、彼等が呼吸を引取る時まで盗賊であつた。しかし、一人は救はれたる盗賊として死んだ。モ一一人は救はれざる盗賊として死んだ。

△「さて、貴君は救はれないのでせうか」

「何うして私は救はるゝ事が出来ませう」

「唯だ、眺めよ」

「しかし、私は屢々眺めることを試つて見ました。そして私の思念に、私の爲に十字架に釘けられ給ふたイエスの光景を畫くことをつとめました」

「それは眞個の途ではありません。十字架上のキリストは夢でもなければ、幻でもなく、また單に思想でもないのです。神は、左様なものを賜へたまひません。假りに、私が今夜死ぬる身體とする、床に横つてゐる時、悪魔は私の許に來り、私の救はれてゐないことを告げる。假りに私は彼に對ひ「前に私はキリストが私の爲に十字架に懸けられ給ふ幻を見たことがある」と答へる。悪魔は續いて

「あゝ、それは皆盡感だ。おれはお前を欺す爲にお前の眼前に、そ

れを持つて來たのだ」

「しかし、ある夜、わたくしはキリストが直接に私の處へお出になつて、汝は余の有であると言ふたことを夢にみた」

「それも一切盡感だ」

「私は、ある日、私の胸に一の思想が閃いた。其時私は確かに救はれたと感じた」

「何もかも唯盡感ばかりだ」

「私は何んとも悪魔に答ふることは出来ない。しかし、今私は彼を打敗る途を示す。私は今度は聖書を開いて悪魔に對つた。私は言つた。

「神はキリストを私に賜へたことを私に仰せ給ふた」

「奈何してお前がそんな事を知るのだい」

「それは神が宣ふたからである。神はその聖子を賜ふほどに世人を愛したと御自身仰せ給ふた」

「しかし、お前の如な大罪人が、唯だ神の賜物としてキリストを接くるなら、救はれることが出来る」と奈何して考へられるんだ」

「然うだ、何とならば、神は子を信する者は永生を有つと宣ふたからである」

ところで、悪魔はそれが録されてあるから、何んとも言ふことが出来ない。「我儕の兄弟は羔の血および己が證し、所の道に因て之に勝り」貴君は、私が悪魔の前に、私の感じた事や、想像の如きものを示さないで、唯だ神の口より出でし聖語を示したことは御覽の通りである。キリストを眺めるといふことも、要するに、神の言に由てキリストを観る事に他ならない。

△「貴君は、キリストの血に洗はれたくはないですか、そして永遠に潔られたくはありませんか」

「しかし、何うして左様な事が出来ますか。貴君は彼の血を何うなさるのですか。私は屢々其れについて聞きました。そして私は屢々試つて見ました。私は床の上に横つてゐる間、イエスの傷ける手足、その刺されし脇腹から迸しる血の有様を私の眼の前に持つて來やうと試みました」

「さて、之れはまた他の誤謬です。血は、亡くなつた生命の模型で、血を見るとは、貴君の身代りに神の聖子の死給ふたことを信ずることを意味します。そして、貴君が貴君の部屋で、キリストの死を心で満足して居ることは、取りも直さず、貴君が血に洗はれた有様です。貴君は、眞個の血、幻、あるひは血の畫を見ることは出来ずま

い。しかし、神の聖書から讀まれたでせう。「彼はわれらの（信仰は又私のと言ふ）懲のために傷けられ、われらの不義のために碎かれみづから懲罰をうけてわれらに平安をあたふ、そのうたれし瘡によりてわれらは癒されたり」（賽五十三〇五）これは血を見ることである」

△「貴君はキリストに來ることを欲ひませんか」

「しかし、奈何して私がキリストの許に行けませうか。私は彼が

「凡て疲れたる者また重さを負へる者は我に來れ、われなんぢらをお慰ません」（太十一〇廿八）と宣ふた所を讀みました。而して私は彼が地上に在し給ふた時、私も其處にゐたならばと屢々欲ひました。其時は、若し、私の家の前をお通行になる彼を見たら、馳けて行つて彼の衣の裾に觸つたでせう。しかし、彼は今、天に在し給ひま

す。奈何して私は、彼に來ることが出来るでせうか」

「さて、神は最も美はしく此の事を説明し給ひました。吾等はキリストを誘ひ下らん爲に天に昇らんと言つたり、またキリストを死し者の中より誘ひ還らん爲に陰府に降らんと言ふ筈ではありません。しかし、彼は復活つて天に行き給ひました。而して彼はその聖言を遺し給ひました。吾等は今、唯だその聖言に由つて彼を見出し得るばかりです。此の聖言は貴君の手にある。また記憶に存してゐる。聖言は聖靈に由て録されたもので、それは神が貴君に獨子を賜へたまふ程に貴君を愛し給へることを信するやうに貴君に勧める言葉です。これが「キリストに來る」ことです。今、彼は天に在し給ひます。而して彼の靈と彼の言は皆聖書の中に遺されてゐます。これは充分でないでせうか。貴君は、貴君の名が天とか、海邊とかに録さ

れてゐるのを見、それに神の指跡があるのを見たら、貴君は自分の救はれてゐることを信ずるでせう。しかし、貴君は神が他の途を取り給ふて貴君の爲に特別な黙示を造り給ふたことを考へませんか。貴君は憐れなる罪人なる我等が、此唯一の信ずることに由て、救を得た如く、貴君も得なければなりません」

△「しかし、私は神の時を待つ筈ではないですか」

「神は、唯一の時を有ち給ふばかりです。即ち、それは「今日」です。私が聖書中に「明日」といふ語を読みましたが、それはエジプト王のバロが蛙の取去られるやうに願つた時でした。しかし、明日は人の時です。神の時は今日です。若し、貴君が小川の前に来るなら貴君は「私は流れが過ぎて了ふまで待ちませう。そして枯いたら渡りませう」と言はれますか。左様な事はありますまい。神こそ、却て貴

君を待つてゐる給ひます。彼は貴君を招いてゐる給ひます。彼は貴君を求め給ふのです。そして彼の唯一の要求は、之れです。

「私の賜物なる我聖子を受けよ」と。彼は世界の人々、殊に理屈ポイ人々の靈魂に對つて呼び給ふ。「汝は彼を我有とするを願ふか」と。

「若し、私が、キリストは我有であつたことを私に語つてゐるのを感じることが出来たら、私は信ずるでせう」

「それはまた可けません。それは、神の右に坐し給ふ彼に倚頼むこと、彼の確實なる聖言に息むこと以外の何かを信ずることです」

△「しかし、私は悔改めなければならんのですか」

「確かに然うです。しかし、これまで、この美はしい意味の深い聖書的の言語が、却て悲しみに充てる靈魂に用ゆるに最も危険である程までに妄用されました。多數の救はれてゐない人々は、悔改に由

て、神に携来られるものだと思ふてゐる。或は罪の爲に悲しむ分量だの、品行が方正しいことだので義とせらるゝことが出来ると思ふてゐる。これは律法主義の最も悪い所なのです。一體この「悔改」なる語は意味深いです。第一は罪人が賜物を受けられた時ですその第二は「彼の罪につける眞の意識」、それは彼が彼の罪について自己の評量よりも、寧ろ神の評量を重んじ、彼は失はれし罪人の位置をとり、神が吾等について宣ふた通りその品性の極悪汚穢なることを認めることでありませす」

また「キリストに在る神の慈悲を理解すること」。彼は、神の造り給ひし準備を受けます。そして今、救はれた彼は神の人です。そこで、彼は神の悲憂を抱く者となります。救はれる前に、人々の有てる悲憂は罪の爲に罰せらるゝといふ單純な悲憂です。しかし神の悲

憂は罪の深い事についてです。斯様なのが聖書的の「悔改」です。しかし、それは智識ある宗教家等に曲られました」

△兎に角、貴君は之れを信ずるか、信じないか。救はれたくないか、救はれたいのか。私は憐なる罪人の恩恵に由て救はれたことを語つた。貴君は彼の如く救はるゝことが出来まいか。神は貴君の行すべき事を語り給ふ。神は貴君を愛することを語り、そして、御自身に倚頼むべきことを語り給ふ。神は貴君に獨子を賜ふたことを語り、貴君がそれを信ずべきことを語りたまふ。神は貴君の一切の罪をキリストの上に置いたことを語り、それらの罪が彼の上にありし故に、貴君の上にはなきことを信せんことを語り給ふ。神は貴君が迷ふたことを語り、また貴君の不義のキリストの上に置かれたことの信ずべきことを語り給ふ。成就されしキリストの救の爲に神に感謝せよ。

彼は貴君の身代なる主イエスと偕にあることを奈何に悦んでる給ふかを彼に告げよ。貴君の現在をかく告げよ。

われは空しき罪人なれど

イエスキリストはわがすべて。

△神は御自身、聖名の爲めに、「キリストが貴君の爲である」との單純な福音を貴君に示し給ふ。ところで、ある愛せらるる兄弟は、自分分が暗黒の外に出て來た時の事を述べてかやうに言つた。「餘り單純なので躓くのである。眞個とするには餘り善過ぎた福音である」と。しかし我等の關係する神の神たる事を知れば決して善過ぎるわけではない。貴君は、神が罪を大目に看給はぬことを知つてゐる。彼はある人を赦し給ふ。しかし、その罪をその儘棄て置き給ふのではない。彼は罪を犯せるアダムの立場の外に吾等をとつて、その復活れ

るキリストの新しい立場に置き給ふことが出来る。彼の賜物を接る者（單純に接る者）は、奈何なる極悪の邪曲の暗黒の罪人にて直に救はるゝことが出来る。貴君は、彼を接れたいか。貴君は貧しく裸體なる不幸なる者であつても、神は、貴君に彼の獨子を贈り給ふた。彼は吾等の爲に世界のあらゆるものを造り給ふた。しかし、何者も彼の賜ひしもの——主イエスキリストに比較し得べきものはない。キリストを有たないで地獄を免るゝことは到底出来ない。貴君は一切の愉快を有ち、全く倫理的で、善人で、正義な宗教的人であつても、キリストなしに天國は貴君の有ではない。正義、善、親切、慈善、端正、温順、斯の如き者は貴君を救ふて呉れない。貴君は、神の賜物を接くること以外に救はるゝ途を有たないのである。△さて、それは唯だ吾等の行すべき分である。恐らくは、決して、

永遠に變ずるやうなことはない。神の福音は、最も惡しき者、最も貧しき者、最も弱き者の爲である。愚者もそれを抱き得るのである。キリストは凡の者にまで賜へられた。ある者は彼を接け、ある者は彼を拒むのであらう。若し貴君が彼を接けないなら、貴君は神を虚偽者たらしめる。若し貴君が彼を接るなら、貴君は自分を虚偽者たらしめ、神を眞實者として立てることが出来る。ある人は、彼等に贈られし神の賜なるキリストを聞いてゐる。しかし、彼御自身を知つてゐない。「永生とは唯獨の眞神なる爾と其遣はし、イエスキリストをしるこれ也」(約十七〇三) 彼を接けぬ人々は主イエスの貴き血を脚下に踏にじつてゐる。しかし、他の者は、彼を接け、その賜物のために神に感謝する。而して救はれてゐる。

キリストの證者なる聖靈が、彼を觀ることの出来るやうに、各自

の眼を開き、暗黒なる罪人をして神を信ずべく導き、その大なる賜物を受けしめ給はん事を願ふ。

明治四十二年十一月十五日印刷
明治四十二年十一月二十日發行

(定價一冊金參錢)
(郵稅四冊迄貳錢)

編輯者 同信館編輯部
發行者 淺田正吉
印刷者 松永米二郎
印刷所 東洋印刷株式會社

東京市神田區錦町三丁目二十四番地

發行所 (振替貯金東京) 同信館書店
(一九五五四番)

柳澤讓遺著

靈か肉か 保惠師基督 無差別

(何故信者が罪を犯すか)

定價 一冊 金貳錢

郵税 八冊迄 金貳錢

(信者の犯す罪は何うなるか)

定價 一冊 金參錢

郵税 六冊迄 金貳錢

(『人には區別なし』羅馬書三章廿二、廿三)

定價 一冊 金參錢

郵税 五冊迄 金貳錢

翻譯もあれど創見もあらん、いづれも有益なる好小冊子な

り『救済問題』と共に四冊一時に御註文の節は郵税共金拾錢

にて宜しく、尙多數御入用の向へは割引可仕候

36
預言通覽

再版

總クローリス 四百七十四頁 定價金五拾錢 郵税金八錢

○主耶蘇の德行之榮光

(敬虔の精神紙面に横溢す)

定價金八錢 郵税金貳錢

○神のめぐみとダニエル、マン

(死刑前三週間の進歩)

定價金拾錢 郵税金貳錢

○聖潔之源

(羅馬書七章及八章に就て) 新刊

定價金五錢 郵税金貳錢

○聖書は神の默示

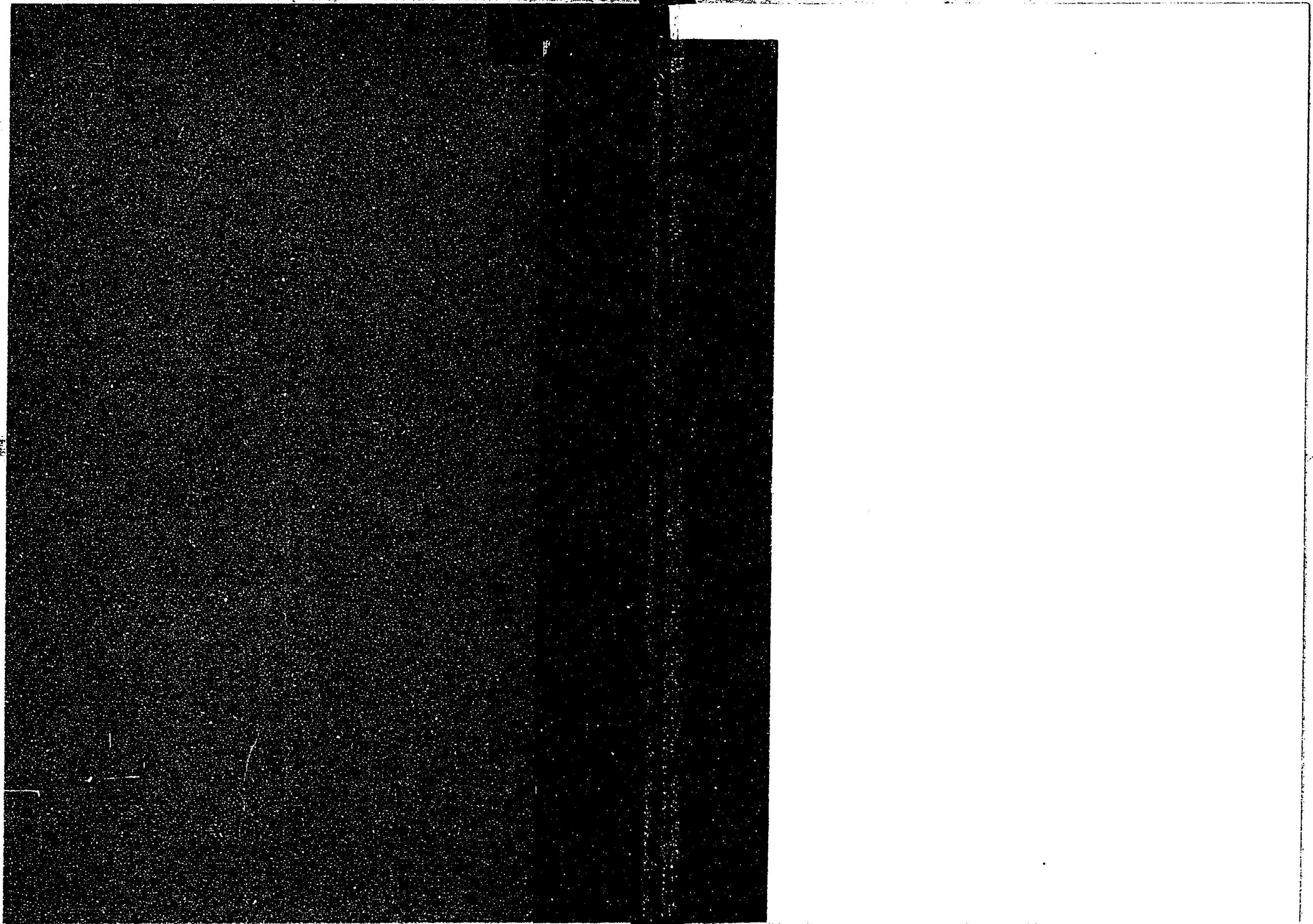
新刊

定價金四錢 郵税金貳錢

○殉教美談 闇夜之微光

(宗教改革時代の殉教者の逸話集)

定價金廿五錢 郵税金四錢





8